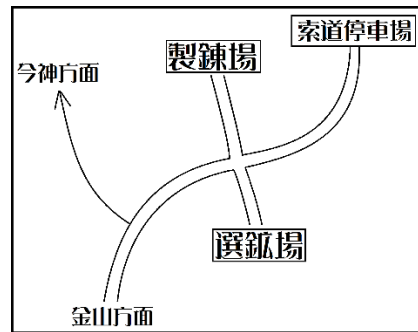


村歴通信 第十七號



「大蔵鉱山 鉱夫の作業」のこと

前回、大蔵鉱山における鉱夫達の生活にスポットを当てました。今回は、鉱山での採掘・製銅作業に迫ります。

坑道では発破で採掘を行い、採石は人力、もしくは馬を使って坑外へ運び出されます。

鉱石はまず選鉱場へと運ばれます。

大蔵選鉱場に着すと入口に近き所に台板あり、その板上に泥状の粉鉱水が流され、台板は間断なく左右振動をなす。此れ粉鉱を選り分くる器械にして、跳汰機といふ。

此处より梯子で二階に行けば、瓦斯発動機あり、この工場の階下より階上に至る幾十の器は瓦斯発動機によりて運転し、或いは鉱石を砕き、或いは選鉱せらる。

その上の三階には円形の大なる台板ありて、数人の女工その上に立ちて、鉱石の手選をなす。この板を手選台といふ。

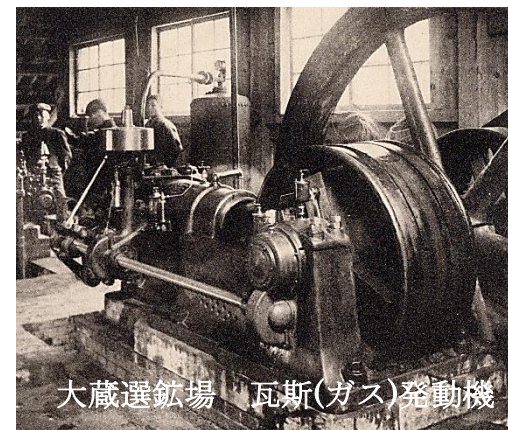
粗鉱(含有率 10%以下)は大概一寸二分に破砕し、十数名の女工に依り、精鉱・片羽・捨石に区別され、片羽はロウルにて一定大に粉碎され、水流と共に跳汰機に移送せらる。跳汰機は比重の差で銅含有鉱石を選別し、滓は比重軽く上部より流出する装置なり。

選鉱された鉱石は、運搬夫により大ソリで製錬場に運ばれます。

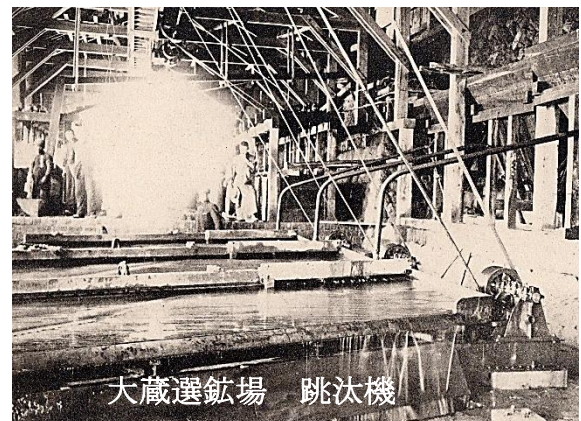
(百貫(375kg)で 15 銭の賃金となり、エースは 1 回で三百貫を運んだそうです)



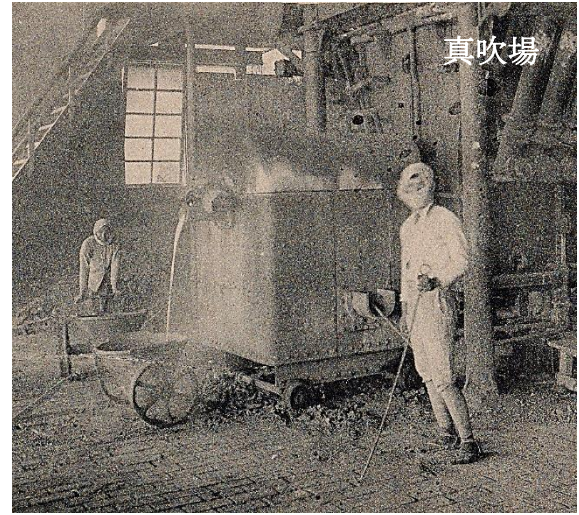
大蔵選鉱場 外観



大蔵選鉱場 瓦斯(ガス)発動機



大蔵選鉱場 跳汰機



製錬場は、**新(鍵金野)**旧(カルデラ館)の2ヶ所あり、**新製錬場**が選
 鉱場に近く、容量も2倍でした。

製錬場は選鉱したる鉱石を溶解して、銅を母岩より分離する所にして、ここには大なる鉱炉ありて、その上口より絶えず深紅の熱汁流出す。鉱夫は鉄製の乳母車様の入物にその熱汁を注集せしめて之を捨つる。時には長き柄の鉄杓を以て熱汁を汲み取りて、他の土製の甕に移すもあり、或いは銅を鑄型に注ぐもあり。鉱石を溶解する際に生ずる亜硫酸ガスの臭気甚だしきに鉱夫は平然と作業に従事す。冬期極寒の際はさもあらざれど、炎熱盛夏の候には如何に苦しき事ならん。



製錬を終えた銅は、**真吹**と電気分解により、更に純度の高い精銅 **「大蔵銅」**として出荷されます。

当時は古口まで直通のロープウェーが設置されており、銅は空を飛び、汽車に積まれて運ばれてゆきました。

